



慶應義塾大学
教養研究センター

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

Tel 045-566-1151 Fax 045-566-1102

Mail toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



単位認定・少人数ゼミ形式

2017年度
全体ガイダンス

4/5 16:45~18:00
Wed. 会場: D101

教養研究センター設置科目



■ アカデミック・スキルズⅡ

Academic Skills



■ 生命の教養学

The Liberal Arts of Life



■ 身体知・音楽Ⅱ

Learning Through Affective Experience and
Active Participation:
Historical Performance Practice of Music



■ 身体知

Learning Through Affective Experience and
Active Participation



■ 身体知・映像Ⅱ

Learning Through Affective Experience and
Active Participation: from Language to Films



■ 身体知・音楽ⅢⅣ

Learning Through Affective Experience and
Active Participation:
Historical Performance Practice of Music

いま、最先端の学問は
「教養」かもしれない。



慶應義塾大学教養研究センター



のすゝめ

大学は専門教育と教養教育の両輪で成り立ちます。

なぜなら、複雑な現実社会の中で専門的知識はそのまま役立つものではないからです。

専門的知識は応用しないと、現実には、はまりません。

応用するために必要なもの。

それが教養です。

さらに専門教育は限られた一分野に徹するから専門。

世の中を生きていくためには専門だけでは偏ります。

そこでも教養は不可欠なのです。

福澤諭吉先生も言っています。

「決して字を読むことのみを勧むるに非ず」

『学問のすゝめ』の中の言葉です。書齋で狭い学問をしているだけでは駄目だということです。

社会的・実践的に、からだを動かして学ぶことまで含めた、広い学問の必要性を述べた言葉です。

福澤先生による「教養のすゝめ」と解してよいでしょう。

教養研究センターは慶應義塾における教養教育の力強い担い手です。

様々な授業を設置して、学部のにぎやにたわれない、教養教育の実践に取り組んでいます。

ぜひ、全体ガイダンスに参加いただき、履修の参考にいただければと思います。

担当教員からのメッセージ

■ アカデミック・スキルズⅡ

法学部教授 片山杜秀

Academic Skills



**レポートと論文の違い。
プレゼンテーションの仕方を基本から学びます。**

論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を徹底指導。減多にない授業です。大学の授業ではレポートを書く機会が増えます。3、4年生になると論文の執筆を求められることもあるでしょう。では、レポートと論文はどう違うのか。さらに内容を口頭で発表するときはどうするか。アカデミック・スキルズはそのスキルをみなさんに伝授します。

■ 身体知

法学部教授 横山千晶

Learning Through Affective Experience and Active Participation



**言葉と体を通して
全く新しい自分に出会ってみよう。**

普段皆さんが読んでいる小説。それを声に出して読んでみたら・・・他者と一緒に議論してみたら・・・絵や歌、体を使って表現してみたら・・・ふだん私たちが「学び」と思っていることを全く異なる方法で「体感」してみる授業です。

■ 生命の教養学

文学部准教授 赤江雄一

The Liberal Arts of Life



**「生命」をめぐって各界の第一線で活躍する講師が登壇。
最先端の議論に触れて「生きる」ことへの認識を深めませんか。**

それぞれの分野で取り組んでこられた十余名の講師が登壇し、ご自身が積み重ねてこられた研究や実践を読み解く濃密な講義を1回ずつしていただきます。「生命」をめぐって照らし出される豊饒な知の地平と一緒に見渡しましょう。質疑応答の時間がたっぷりとりとられていて毎回盛り上がります。積極的に質問をしてください。

■ 身体知・映像Ⅱ

法学部教授 佐藤元状

Learning Through Affective Experience and Active Participation:from Language to Films



**映画制作を中心に据えた
慶應義塾大学唯一のユニークな授業です。**

本授業では、学生、教員、ティーチング・アシスタント、ゲスト講師と、参加者全員で力を合わせて、年度末に一つの映画作品を作り上げます。この目標に向かって、演技、撮影、編集、脚本、監督など、映画制作のすべての仕事をオールラウンドにこなしていきます。

■ 身体知・音楽Ⅱ

声楽：商学部教授 佐藤望

器楽：経済学部教授 石井明

Learning Through Affective Experience and Active Participation: Historical Performance Practice of Music



**歴史的音楽（器楽・声楽）を、
当時の演奏習慣に基づき演奏していきます。**

音楽は、身体を介在し表現され、歴史の中で常に、人間の知的な活動と連携してきました。この授業では、音楽を身体で表現することを通じて、歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から見つめ直すことを目的としています。

※「身体知・音楽ⅢⅣ」は、「身体知・音楽ⅠⅡ」の既修者が履修できる科目です。2017年度の開講については、全体ガイダンス時に説明します。

アカデミック・スキルズⅠⅡ

知の基礎を築く



大学では「自ら考え、調べ、論ずること」が求められます。これは学問研究の出発点であると共に、長い人生を送る上で不可欠な「教養」という知的基礎体力を身につけるための基盤でもあります。

そこでこの「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけることがこの授業の目的です。多分野にまたがる複数の教員が担当しており、学生の自主性を尊重し、学生の知的関心を活性化させるための授業が展開されています。少人数セミナー形式の授業で、現在はアカデミック・スキルズⅠⅡ 4クラスで設置され、7学部の学生で約80名が履修しています。年度末には、各クラスのメンバーが参加して、論文とプレゼンテーションのコンペティションが実施されています。



授業の特長

- 学部共通科目で少人数制
色々な学部、学年の学生との出会いや議論を通じて、多様な個性や価値観とふれあうことができます。
- 1クラス3名(原則)の教員が担当
複数の先生と接することで、複眼的思考や多様な解決手法を学ぶことができます。
- 1年のまとめの論文を「アカデミック・スキルズ学生論文集」として刊行
これまでに刊行された論文集は図書室で閲覧することができます。



慶應義塾大学日吉キャンパス学習相談員「学生による学生のためのダメレポート脱出法」(慶應義塾大学出版会、2014)

授業紹介

論文を書き、発表する。
全ての過程を系統立てて学んでいきます。

論文を書くためにはどうするか。テーマの選び方・絞り方。図書館やネット上での情報の探し方。論の立て方・進め方。結論の出し方。さらにそれを口頭でスライドを付けて大勢の前で発表するためには？それらのスキルを順々に系統立てて学んでいきます。大学で学問するためにも、社会に出てからも、末永く役立つ内容です。授業は少人数セミナーのスタイルをとります。塾生20名に対して教員3名というのが基本です。通年で履修してもらい、春学期にはまず4000字の論文を作成します。そして秋学期には、より本格的な8000字の論文を作成し、仕上がった論文をさらに口頭で発表する訓練を行います。年度末には各クラスから最優秀の論文と発表者が選抜され、2月に開催される大きなイベント、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション・コンペティションに参加してもらいます。この厳しくも楽しいコンペティションで、1年の幕がおります。



佐藤望(編著)・湯川武・横山千晶・近藤明彦
「アカデミック・スキルズ
大学生のための知的技法入門 第2版」
(慶應義塾大学出版会、2012)



論文コンペティション入賞作 (一例)

- 経済学部 2年 妖怪ウォッチは長寿アニメ作品になり得るか
- 医学部 1年 Does Salt Damage Human Health?
—A Reflection on Salt Intake Restriction Policy in Japan—

プレゼンテーション・コンペティション入賞作 (一例)

- 経済学部 2年 坂の内包する宗教観
—東京を事例として—
- 法学部 2年 演劇改良と女形
—なぜ歌舞伎に女優はいないのか

学生の声

自分の納得がいくまで、
教授の方々と徹底的に突き詰められる環境が魅力です。

経済学部2年
(2016年度受講生)

教授の方々と距離が近いことが講座の一番の魅力です。授業中に助言を頂けるだけでなく、授業終了後に論文の方向性を共に考えて頂いたり、提出した論文草稿を授業時間外に添削して頂けたり、とても真摯に生徒一人一人の指導を行ってくださいます。また、実際に教授の方が使用している資料集を見せて頂けたり、専門に関する質問ができるなど、ほかの授業ではできない体験ができます。講座を通じて、資料検索のスキルが格段に向上しました。以前はただ闇雲に検索をかけていただけでしたが、資料検索の方法と必要な資料の内容の絞り方を体系的に学んだことで、欲しい資料を的確に見つけられるようになりました。また、エビデンスを集める過程で多くの論文に触れ、実際に自分で論文を書いてみたことで、論文とは何を表すべき場なのかで自分の中で明確になり、論文を書くことの意義を理解できたように思えます。

学術的なレポートや論文を
スラスラとかけるまでに成長することができました。

法学部1年
(2016年度受講生)

1年生から論文執筆やプレゼンテーションの機会があり、いろんな学部の仲間とディスカッションを通じて問題発見・解決能力を身につけられることにとても魅力を感じ、受講を決意しました。講座では、自分一人で論文を書いているときには見落としていた点を、先生や同じテーブルのメンバーに指摘してもらって初めて気づくことがよくあります。互いにフィードバックをして新しい気づきを生み出すこの授業は、学年も学部も超えて教え合い学び合うことができる貴重な環境です。また、この講座を通じて、まだ誰も答えを見つけていない問題を見出し、仮説を立てて検証し、結論を導くという「実証科学」のプロセスを、実践を通じて学ぶことができます。アカデミック・スキルズは「半学半教」と「実学」を取り入れた、慶應義塾ならではの強みを生かした講座だと感じています。

身体知

創造的コミュニケーションと言語力



私たちはもちろん体を通して生きている。それは当然のことですが、あらためてこの「身体」に注目した全く新しい学びの在り方を、自分たちで探っていくワークショップ形式の授業です。鑑賞する対象の芸術作品を他者とともに議論したり、身体ワークショップを通して解釈したりしてみると、どんな新しいことが見えてくるだろう。そこから自分たち自身が創作者になってみたらどうだろう。創作したものを他者はどう見るだろう。そんな経験をワークショップを通して、異なる世代と味わうことが「身体知」授業の醍醐味です。夏季休校中の1週間を使って、集中的に通信教育課程の学生と通学生がともに活動するのもこのクラスの特徴。「学び」、「仲間」との新しい出会いのみならず、新しい自分との出会いが待っています。



武藤浩史『「チャタレー夫人の恋人」と身体知』（筑摩書房、2010）



授業の特長

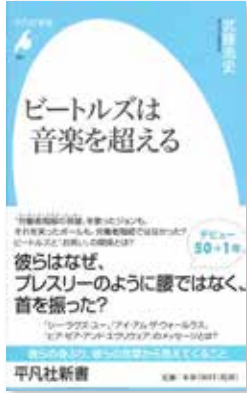
- 全く新しい学びの体験
座学ではない、頭も体も総動員する授業です。
- 異なる世代が集う授業
通信教育課程の学生と通学生とが世代を超えて場を共有します。
- 夏期集中コース
夏季休校の1週間を使った集中コースです。



授業紹介

言葉に命を吹き込んでみる。

通学課程と通信教育課程の学生がともに学ぶ場です。いくつかの短編小説を「読む」・「声に出す」・「語る」ことを通して、言葉が織りなす様々な意味を味わってみましょう。自分がそこから読み解くことが他者とどう異なるのか。声というものを通して文学作品を読むとどう自分の解釈が異なってくるのか。直に体感してみてください。その後、様々な身体ワークショップを取り混ぜながら、創作へと向かいます。他者の話を「聴く」・「からだで表現する」・「言葉で表現する」といういくつかの段階を経て、そこでの体験をもとに、言語や身体を使った新しい創作表現へとつなげます。性別や年代が異なるクラス環境だからこそ可能になる授業内容を展開していきたいと思っています。最終的に成果を一般に公開するミニ公演を開催し、皆さんの作品を他者とシェアします。



武藤浩史
「ビートルズは音楽を超える」
(平凡社新書、2013)

近年のテーマ

2014・2016年度 ビートルズを読み解く

ビートルズの「音楽」の世界を、文学として読み解くことで、込められた世界観を新たな側面から解釈していきました。音楽と歌詞にとどまらず、詩や絵、写真、インタビューでの彼らの言葉、映画、パフォーマンスなど、様々な観点からビートルズを生み出した時代性にも迫りました。身体ワークショップによる、新たな表現も平行して行いました。最終的に成果発表会を行い、ビートルズから学んだ「自由」を表現しました。

2015年度 声と記憶

ジェイムズ・ジョイスなどの記憶にかかわる文学作品を「読む」・「声に出す」作業を行ったのちに、「語る」・「聴く」・「からだで表現する」・「からだで受け止める」といういくつかの段階を経て、ともに読んだ作品を通して、他者の体験を聴き、創作につなげ、最終的に身体表現へと導く授業を展開しました。

学生の声

表現するさまざまなアプローチを学び 幅広い人へのコミュニケーション力がつきました。

法学部2年
(2015年度受講生)

学んだことを実践する機会はなかなかありませんが、この授業で実践することで、プレゼンテーション能力の向上にもつながると考えて受講しました。この授業では、「表現する」という目標に向かって、さまざまなアプローチを実践出来ます。「ブラインドウォーク」をはじめ、英文の朗読、アクティブリスニング、絵画の発表など、そのすべてが印象に残っています。中でも、心に残る名文に出会えたことがよかったです。Steven Millhauser氏の「Getting Closer」は今でも時折思い出します。さらに集中的なワークショップ形式で、受講者が多様なことも貴重。通学課程と通信教育課程の学生がコミュニケーションを取る授業スタイルも興味深かったです。授業を経て変わった事は、アクティブリスニングを実践したり、朗読にじっくり取り組んだことによって、異なる年代、性別の人とも怖くなく交流することができるようになりました。このことは社会人になっても、家族生活にも大きく影響すると思います。

生命の教養学

感染



2016年5月13日 奈良雅俊氏

この授業は「生命とは何か、〈生きる〉とはどういうことなのか」という問いから始まる知的探究への誘いとして構想されています。「生命」については、生物学を中心に主に自然科学に属する諸分野が「生命科学」として研究を進めています。しかし、哲学・文学・歴史学・文化人類学などの人文学、そして経済学や政治学といった社会科学も、もちろんそれぞれに異なる角度からこの問いにかかわっています。

一面的に捉えるのにはもともと適していないこのような問い・対象を見定めるためには何が必要か。それは、特定の学問領域に偏ることなく思考の材料を広く求め、とはいえ各領域の研究成果には十分な敬意を払い、そこから獲得された雑多な材料をもとに新たな知の組織を工夫しようとする態度です。これを「教養」と呼ぶならば、それをみなさんが涵養するための材料と場を提供するのが「生命の教養学」の授業です。

高桑和巳(編)「新生 生命の教養学X」(慶應義塾大学出版会、2014)



高桑和巳(編)「性 生命の教養学11」(慶應義塾大学出版会、2015)

授業の特長

多彩な分野を代表する講師たちによって
おこなわれるオムニバス授業

自然科学、社会科学、人文学など、多彩な分野のそれぞれ最先端で活躍している講師が週替わりで登壇し、濃厚な講義をおこないます。各講義では原則として1時間程度の講義後、自由な質疑の時間が設けられます。学期の最初と最後には、コーディネイターによるオリエンテーションと総括がおこなわれます。



2014年7月4日 長沖暁子氏

授業紹介

本年度のテーマは「感染」。
新しい知のウィルスに感染しよう。

2017年度のテーマは「感染」です。大気、水、土、動物など、この世界は、裸眼では捉えることのできない微生物でいっぱい。それらは細菌、ウィルス、カビや酵母などの真菌などですが、そのうちのあるものが病原体として人間の体に入り込んで住みつく、つまり「感染」することで生じる病気等が感染症です。身近な風邪やインフルエンザから、最近知られるようになったエボラ出血熱やジカウィルス、また人類の歴史上多大な被害をもたらしてきた天然痘、結核、コレラ、ペストなど、さらにAIDSを思い浮かべるだけでも、人の生命の営みにとって感染がいかに重要な問題でありつづけてきているかあきらかです。さらに「感染」という概念は元の生物学的医学の意味から拡張され、近年は自然科学的には捉えられないとされてきた文化や知識についても感染というモデルが適用されるようになりつつあります。「感染」という切り口から「生命の教養学」を探検しませんか。



2016年6月24日 福田真嗣氏

2017年度「生命の教養学」出講講師

「うつるんです～感染と文学」
石塚久郎(専修大学文学部教授)

「感染してくる“奴ら”の生物学的正体と生体防御の基礎」
小野裕剛(本学法学部准教授)

「無症候性キャリア(健康保菌者)と近現代社会の歴史」
鈴木晃仁(本学法学部教授)

「表象としての「感染」：ゾンビからキョンシーへ」
山下一夫(本学理工学部准教授)

「感染症と医学：社会の対応の歴史」
鎌倉光宏(本学看護医療学部教授)

「地球規模課題としての生命を考える：
新たな挑戦と機会に満ちた新分野」
中谷比呂樹(本学グローバルリサーチインスティテュート
特任教授(KGRI))

「人口と感染症の数理」
稲葉 寿(東京大学大学院数理科学研究科教授)

予定、敬称略。肩書きは2017年1月現在

過去の開催一覧

2016年度 ● 「飼う」 2015年度 ● 「食べる」 2014年度 ● 「性」 2013年度 ● 「新生」

学生の声

一つの事象を多角的に深める
分野横断の学びの楽しさが、ここに。

商学部1年
(2015年度受講生)

オムニバス形式で、さまざまな方面で活躍されている研究者の方から、多角的な視座で講義を受けられることが魅力です。学習内容をインプットするだけでなく、関連付けて捉え直すことができます。2015年度の「食べる」というテーマにしても、グローバリゼーション、農業の現状、発酵食品、スローフード、肥満、エネルギーバランスなど、多彩な側面からのアプローチで、複眼的に、深く問題を考えることができました。

大学での教養科目の意義は「得た知識を関連させ、昇華させることで学問の楽しさに出会う」といわれますが、この連続講義を通じて、一つのテーマでも、ここまで多くの視点から思考を深められるのかと驚いたと同時に、回を重ねるにつれ蓄積された知識を活かして聴講できるようになりました。他の一般教養科目とも共通する学びを実感でき、分野横断の学びの楽しさに触れられました。

身体知・映像ⅠⅡ

物語映画を読む、創る



本授業の目的は、映像作品の創作を通じた「新しい言語能力」の習得です。新しい言語能力とは何か。文学作品を映像化するためには、まず物語の構造を読み解き（批評）、文字で表現されている物語を動きや発話に変換しなければなりません（脚本）。さらに、映像が観客に美的体験として届けられるためには、物語を実際に身体で表現し（演技）、映像言語を駆使した視覚表現として統合していく（撮影・編集）必要があります。ひとつの物語を、言葉、身体、視覚という異なる形式へ変換していくこと、それを、他の受講者とのコミュニケーションを通じて具体化していくこと。この過程のなかで、事物の複雑なありようを捉え、他者への想像力を働かせる、研ぎすまされた言語能力が身についていくはずで



授業の特長

映像制作の経験は問いません

経験の有無を問わず誰もが持っている映像言語を掘り起こし、表現できるようになるプログラムです。

言語、身体、視覚など、多様な表現にチャレンジします

撮影や映像編集だけではなく、小説の読み解きやエチュードによる脚本づくりなど、様々な表現のレッスンをを行います。

受講者同士のコミュニケーションを重視します

映像制作は、一人ではできません。受講者それぞれが自分の持ち味を活かした役割を担い、共同で制作を進めます。

第一線のアーティストを特別講師として招聘します

映像作家、脚本家など第一線のアーティストを招き、撮影手法や物語の構成など、専門的なレッスンをを行います。

授業紹介

映像制作を通じ、チームワークを学び、言語、身体、視覚をめぐる様々な表現に挑戦。

映画の制作を通じて、多様な言語能力の可能性を探る新たな授業です。映画や小説の読解、脚本制作や映像制作のワークショップを通じて、言語、身体、視覚をめぐる様々な表現に挑戦していきます。これまでレイモンド・カーヴァー「大聖堂」（2013年度）、アイザック・アシモフ「うそつき！（I、ロボット）」（2014年度）、ポール・ブロックス「A-Z」、「鏡」（2015年度）、川端康成「非常」（2016年度）の映像化に取り組みました。受講者のほとんどが映像制作は未経験であるにもかかわらず、完成作品はすべて、見応えのある優れた映画作品となりました。観客の心に届く作品を作り上げるためには、物語構造の理解と映像言語の習得が不可欠ですが、この授業のなかで重要視しているのは、チームワークです。年度末に作り上げる映画作品には、映画制作に携わったすべての参加者の個性が刻印されることになるでしょう。これまでの自分の枠を超えた表現やコミュニケーションに取り組むことのできる、おすすめの授業です。



授業スケジュールの予定

春学期

オリジナルショートフィルムを制作

- 導入ワークショップ「1時間でつくる即興映画」
- 映画のラピッドプロトタイピング：脚本、エチュード、撮影、編集
- 映画の鑑賞と批評
- 映画制作の基本：制作の流れと脚本の書き方
- 演習：オリジナル脚本制作
- 演習：撮影と編集
- 上映会

秋学期

短編小説を映画に

- 小説の読み解き
- ゲストアーティストの作品上映会
- 演習：小説を題材とした脚本制作
- 演習：テストショットと絵コンテ制作
- 演習：撮影と編集
- 上映会

学生の声

専門の方の話を聞いたり、直接指導を受けたり、他の授業では学べないことをたくさん学べます。

文学部1年
(2016年度受講生)

脚本や演技などについて学び、最終的には映像を通してひとつのものを創り上げるということは、まさに私のやりたいことでした。専門の方のお話を聞いたり、直接指導を受けることができるのはとても魅力です。また、同じ趣味を持つ仲間が集まっているので、様々な面で感化されることも多く、本当に受講してよかったと感じています。映画の見方も変わりました。例えば「何故いまその物体をその角度から写したのか」といった、当たり前のように思っていたものまで、今では気に留めるようになっています。映画をつくることは想像していた以上に難しいですが、仲間と話し合い、自分なりに考えを巡らせることで、映像や表現の楽しさ、素晴らしさを再発見することができるので本当にお勧めです。

完成度の高さへの意識と、集団での活動能力が飛躍的に伸びます。

文学部1年
(2016年度受講生)

映画が大好きなので、映画のプロフェッショナルが指導してくださる講座があると聞いて受講を即決しました。「学生だから」という安易な妥協は排除し、いかに高いクオリティを実現できるのか。プロフェッショナルから直接コメントをもらいながら、それを常に意識することの大切さ、難しさを感じ、完成度への意識が叩き込まれました。また、チームでものを進めていく上でのノウハウも獲得できました。授業で映画を制作するチームは、偶然集められた受動的な集団です。そのチームでテーマの設定・脚本の制作・映画の撮影まで、すべてをこなしていくのは大変な作業となります。しかも解こうとしているのは答えのない問い。この講座を受けることで、集団での活動能力が飛躍的に伸びることは間違いありません。

身体知・音楽ⅠⅡ

—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—
—古楽器を通じた歴史的音楽実践—



写真提供：(公財)横浜市芸術文化振興財団

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直します。音楽演奏の実践体験によって、身体を通じた歴史・文化・言語の総合的な学習を行います。

器楽・声楽それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、耳と感性知識、身体を結びつけ、それによって身体を媒体として継承される歴史・文化・言語の連関を実際の体験によって学びます。学期末に公開演奏会を行い、学内・地域に開かれたかたちで成果を披露します。

授業の特長

声楽アンサンブルと、器楽アンサンブルの2つの部門に分かれて行われます。

声楽アンサンブル部門

本格的なヴォイス・トレーニングを行い、古今の合唱音楽の実践を行っています。それぞれが自律した演奏者として、他者の音とリズムを感じ、感覚を研ぎ澄ませて、音楽を作り上げていく授業です。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロなど、一般的に古楽器と呼ばれているバロック時代の楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の最大の特徴です。



授業紹介

声楽アンサンブル部門

ここで行う合唱音楽は、皆さんが高校などで体験してきたものよりもさらに一歩上のレベルを目指しています。ときには、聞き慣れた混声4部合唱ではなく、6声、8声、ソロが加わったり、器楽アンサンブルが加わったりといった皆さんがこれまでに経験したことのないような、多彩なレパートリーも取り上げています。少人数のアンサンブルで重要なことは、一人一人の発する声が、それぞれ自律した音楽表現が可能になっていること、そして、それらが重なり合うことによって新しい音響の広がりを聞かせていくことです。それぞれの声の自律、音楽感覚の自律があって、美しい音楽を鳴り響かせることができるのです。そうした音楽創りを目指しています。そのために、まず、しっかりとした呼吸法、声の基礎トレーニングを行い、楽譜の伝えるメッセージを時代背景に注目しながら読み解き、それを音にしていきます。これを通じて、履修者の皆さんの音楽に対する意識・感覚が、新しいものとされていくでしょう。

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロの他に、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・オーボエ、リコーダー、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、バロック時代に使われていた楽器を用いて、当時書かれた、トリオソナタなどの室内楽編成のための作品と、より大きなアンサンブルであるバロック・オーケストラ(20人程度)のために書かれた音楽作品を取り上げ、バロック時代の音楽作品について深く理解していきます。実践を通じ、17・18世紀の作曲家たちが何を演奏者に、そして聴衆に求めていたのかということや、17・18世紀の器楽作品には、どのような音楽的メッセージが込められているのかということなどを、現代ではなく、当時使われていた楽器を用いることで探求していきます。なお、使用ビッチはa=415となります。一年を通じて、2回ほどの成果発表演奏会を、協生館藤原洋記念ホールで行う予定です。



この授業は、日吉音楽学研究室と連携して行っています。
詳しくはホームページ
<http://www.musicology.hc.keio.ac.jp/> をご覧ください。

学生の声

プロの演奏家の手法も学べる 古楽器を演奏する、貴重な経験も魅力。

文学部4年
(2015年度受講生)

声楽アンサンブルを通じて音楽の歴史的・理論的理解を深めるという内容を見て、以前から習っていたピアノへの理解にも繋がると考え受講しました。秋学期の始めの頃のプロの演奏家の方々とのかかわりが印象的です。楽譜や歴史的・理論的な背景や、先生の要望に対して、日本に限らず世界で活躍されているプロの演奏家の方々が、どのような技術でこたえているのかを勉強する良い機会となりました。

授業の魅力は、古楽器とのアンサンブルやバロックの声楽アンサンブルの曲を演奏するという、普通の学生生活ではめったにできない経験ができる点です。自分が演奏しているときの音の聴き方が変わり、この講座を受ける前に習ってきたことの意味がわかってきたような気がします。具体的に言葉で表現できないので、ぜひ受けてみて、変化を体験してみてください。

ホールで発表する体験も貴重でした 古楽器から学んだ音そのものの美しさ。

文学部3年
(2015年度受講生)

受講を決めたのは、音楽を実際に演奏することで作品の特徴を知りその魅力を体感することができると考えたからです。古楽アンサンブルの授業を選択していますが、何よりも第一の魅力は古楽器を用いて演奏できるということ。そして室内楽、あるいはオーケストラの曲を演奏する中で先生から曲の理解、表現方法について適切に指導して頂けることが魅力です。そして何より、実際に自分たちも、毎年2回、ホールで発表するという貴重な機会の中で、様々な学年の受講生とともに演奏をする貴重な場で、良き音楽仲間に出会えるのも大切な経験になりました。この講義を通じて、古楽器の演奏を通じて音の純度、音そのものの美しさについて気づくことができましたし、発表の場が多くコンサートにも多少場馴れすることができるようになり、集団で演奏する上で必要なコミュニケーションを意識しながら楽しめるようになったのが成長を実感するポイントです。

※「身体知・音楽ⅢⅣ」は、「身体知・音楽ⅠⅡ」の既修者が履修できる科目です。2017年度の開講については、全体ガイダンス時に説明します。

Information

● 庄内セミナー 『庄内に学ぶ「生命(いのち)」ー心と体と頭とー』



山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス(TTCK)を拠点として、生命をテーマにした教養セミナーです。学部生・大学院生・社会人が一緒になって対話と議論を中心に据えつつ、専門家や地元の方々の話、体験・体感型プログラムを組み合わせた4日間、自然豊かな庄内の地で精一杯「生命」について考え、語り、体感します。即身仏拝観、山伏体験、藩校・致道館での論語の素読体験、先端生命科学研究所ラボ見学など、過去・現在・未来が体の中を突き抜ける「学び」の場に立ち会ってください。

● 情報の教養学

現在、多くの人は、スマホやパソコンなどを用いて、様々な情報をインターネットから取得したり、発信したりしています。便利ではあるものの、情報漏洩やウイルスなどの危険があります。さらに、利用者のモラルも重要です。歩きスマホでさえ危険なのに、車の運転中にスマホでゲームをしていたため、事故を起こすケースが増えています。2017年度春学期の「情報の教養学」では、「情報の光と影」をテーマに、情報の利用による様々なメリット共に、気を付けなければいけない問題について、多様な分野の一流の講師に講演いただきます。

● 日吉学



日吉キャンパスには、1200種を越える虫や鳥や植物が生息する森、アジア太平洋戦争末期に帝国海軍の秘密基地だったことを物語る数々の遺跡や縄文時代の埋蔵文化財まであります。「日吉学」は、このような自然や遺産の宝庫である日吉キャンパスを素材に、一貫校から大学院までの塾生・教員が協同で、講義とフィールドワークや体験と討論を組み合わせて、思考を鍛える文理融合型の教育プログラムをめざしています。2017年度のテーマは縄文。修了者には「縄文認定書」が授与されます。詳細は「日吉学」で検索してみてください。

● 学習相談

アカデミック・スキルの修了生の有志が、相談員として学習に関するさまざまな相談を受け付けています。お気軽にどうぞ!

期間(予定):4月24日(月)~7月21日(金) 13:00~18:00
場所:図書館1Fスタディサポート



● 寄附講座

教養研究センターに提供される寄附金を基に運営されている講座です。この支援によって実験的な授業を展開し、質の高い授業が正規化され、毎年着実に成果を重ねています。

※詳細はポスター、Web等でご確認ください。

ガイダンス Guidance

1 全体ガイダンス(教養研究センター設置科目ガイダンス)

4月5日(水) 時間 16:45~18:00 場所 日吉第4校舎1階独立館 D101教室

***履修希望者は全体ガイダンスに必ず出席してください。**

2 クラス別ガイダンス ※「身体知」以外は初回授業を兼ねています。

アカデミック・スキルズⅡ 一知の基礎を築くー 全4クラス

【月曜日2時限クラス】(英語版) … **4月10日(月)** 時間 10:45~ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース
【水曜日5時限クラス】…………… **4月12日(水)** 時間 16:30~ 場所 //

【木曜日5時限クラス】…………… **4月13日(木)** 時間 16:30~ 場所 //

【金曜日5時限クラス】…………… **4月 7日(金)** 時間 16:30~ 場所 //

身体知 ー創造的コミュニケーションと言語力ー

【夏期集中講座】…………… **4月 5日(水)** 全体ガイダンスにて説明

生命の教養学 ー 感染 ー

【金曜日3時限】…………… **4月 7日(金)** 時間 13:00~ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース

身体知・映像Ⅱ ー物語映画を読む、創るー

【月曜日5時限】…………… **4月10日(月)** 時間 16:30~ 場所 来往舎1階 シンポジウムスペース

身体知・音楽Ⅱ ー合唱音楽を通じた歴史的音楽実践ー

【土曜日2時限】…………… **4月 8日(土)** 時間 10:45~ 場所 第8校舎811教室

身体知・音楽Ⅱ ー古楽器・合唱音楽を通じた歴史的音楽実践ー

【土曜日2時限】…………… **4月 8日(土)** 時間 10:45~ 場所 独立館 地下2階DB203

身体知・音楽ⅢⅣ ー発展声楽クラスー

全体ガイダンス時に説明します。

履修までの手続き

- 1 全体ガイダンスに出席
- 2 クラス別ガイダンスに出席
- 3 受講申込み
- 4 選考
- 5 結果発表
- 6 履修申告

1)クラス別ガイダンス(初回授業)に出席し、その際に氏名登録した学生のみに「受講申込」の権利を与えます。ただし、定員超過の場合は選考を行います。

2)選考結果発表で合格を確認した学生は、所属学部 of 履修案内に従って「履修申告」をしてください。

(※履修する授業を、どの科目名で履修するかおよび単位の認定は学部によって異なります。所属する学部の履修案内などでよく確認した上で履修申告してください。)